

勝田勝年著

『新井白石の学問と思想』

著者勝田氏は、すではやく昭和一四年に『新井白石の歴史学』（原生閣刊）を発表されているが、それから三十有余年、新石研究のためまぬ努力をつづけられ、その成果を世に問われたのが、すなわち本書である。勝田氏は昭和五年から一〇年間東京大学史料編纂所に在職され、その後地方の教育界をまわられ、さらに郷里松江市に帰られてのち『新修島根県史』の編集・校訂に従事された。戦争を中にはさんだこの三十余年、しかも氏の経歴からも研究条件が十全ではなかった中において「白石研究の灯を消さなかった」（あとがき）情熱にはまったく頭の下る思いである。ちなみに勝田氏は三浦周行博士の甥にあたられる。私が勝田氏と相知ったのは、十数年前、島根県史の史料、また三浦周行伝の史料を調査されている頃であったかと記憶しているが、史料を求める情熱に敬服させられたことであつた。その頃は、私は浅学にして氏を白

石研究の大家とは存じあげなかつたが、いまこの著書に接して、氏の情熱の淵源を見知らされた思いがするのである。

さて本書は三部からなる。「近世封建社会に対する政治的寄与」では、白石の出生から、將軍を輔佐しての政治的活躍の前半生が述べられる。ついで「近世封建史学に対する学問的寄与」では、政界を引退してから死ぬるまでの一〇年間を白石の学問の大成期とみ、前半生に蓄積した学問がいかに大成してゆくかをくわしく述べる。さらに「白石史学と近代史学との関連」では、白石の歴史学が、いかに批判され継承されてゆくかを江戸全期を通じて述べ、福沢諭吉、田口鼎軒の、近代史学発足期における白石の影響を考え、論は羽仁五郎、伊豆公夫、さらに宮崎道生に及んでいる。一言にしていえば、白石の生涯および学問、とくに歴史研究のあゆみの精緻な年代記であり、白石の歴史学の批判継承過程の集成であり、とくに第三部がもっとも特色あるものとなっている。

もつとも論述の方法には問題はなくもない。たとえば史実や引用史料などに関して一切補注がないことである。勝田氏にあつてはすべてこなれきつている問題ではあろ

うが、後学の者には不便この上ない。同じことは先行研究業績の引用に關してもいえる。

だが、そのような通常の学問論述の方法をこの著書に求めるべきではあるまい。白石の著作はもとより江戸時代いらいの無数の研究を説破して、勝田氏の白石学が、ここに述べられているわけである。わが道をゆく白石学と申してもよからう。論考の端々を批判することよりも、困難な条件の中でたゆまぬ研究をつづけられた、その成果だけを、拜読することである。そういう点では、白石研究、また江戸中期以後の思想研究を志さず者の、こよなき入門書でもあるといえよう。

以上撫辭のみをつらねたが、在野研究者の畢生の著作が世にでたことを喜びとして、ここに紹介申しあげる次第である。

(A5判 四七三頁 一九七三年一月)

雄山閣七〇〇〇円)

(神戸大学助教授 熱田 公)